

# 遊びの力

笠間浩幸（同志社女子大学 現代社会学部 現代こども学科教授）

## はじめに

「遊びは子どもを育て、人と人をつなぎ、町をつくり、地域を変える。」

長年、子どもの遊び、その中でも特に何の変哲もないと思われる「砂遊び」に関わるなかで、今このような思いを強く感じている。本稿では、遊びが果たす様々な役割を「遊びの力」と称して、その可能性を探るとともに、そもそも子どもにとって遊びとはどのようなものかについて、筆者自身の経験をもとに考えてみたい。

## 「砂遊び」への着目

今から20数年前、私の娘が3歳の時、1時間以上夢中になって砂場で遊んだ。そのとき私は、娘の傍らで時々声をかける程度の関わりしかしておらず、彼女は1人で黙々と砂遊びを続けていた。

砂遊びの一体何が子どもの心をそこまで惹きつけるのか、とても不思議に感じ、私は次のような疑問をもった。

砂という、とても身近でありふれた素材を、わざわざこれほど大量に子どもの遊びのために集めるという考えは、一体誰によって最初に発想されたものなのか。そもそも、その人物は、子どもにとっての砂遊びの意味をどのようにとらえていたのか。

このような疑問から、私が最初に取り組んだのは、「砂場の歴史」というものを追いかけることであった。

当初、「砂場の歴史」などと言うと、そのようなものに歴史などあるものか、という批判を受けた。また、砂で子どもが遊ぶのは当たり前のものであり、そう考えれば、子どもの歴史とともに砂場の歴史があるのであって、とりたてて追究の対象とするほどのものではないとの意見もあった。しかし、私が問題にしたかったのは、海浜や河岸にある自然の砂地とそこで遊ぶ子どもの姿ではなく、自然の砂地をわざわざ切り取ってつくられた人工的な砂地空間、つまり「砂場」という遊具の起源であり、伝播の経緯であった。このことに関して、石井光恵のことは大きな示唆を与えるものであった。

「違和感を感じさせないまでに、我々の生活に定着している砂場は、ひとつの文化であろう<sup>1)</sup>」

砂場を人間の文化的所産と見る彼女の考えに私は全く同感であり、そうであるならば、その文化をつくり支えてきた文化観、言葉を換えれば砂場にまつわる子ども観、遊び観なるものを是非とも知りたいと考えた。

## 砂場の歴史

日本における砂場は、明治30年代半ば頃から幼稚園に設置されるようになり、大正期に入って一気に普及した。また、大正期から昭和初期に広がりを見せた児童公園にも砂場の設置が進んだ。このように、日本の砂場の歴史は、幼児教育施設から始まったものであるが、ここで1つ注意しておきたいことがある。それは、日本で最初につくられた幼稚園には、砂場は設置されていなかったという事実である。

日本最初の幼稚園というのは、明治9（1876）年に開設された東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）の附属幼稚園であるが、そこに砂場はなく、その後も20年以上、日本の幼稚園には砂場はつくられなかった。

これは当時の保育のあり方と大きく関係する。初期の日本の幼児教育は、大人が定めたカリキュラムと時間割に従い、大人が示す模範と同じように幼稚園の創始者フレーベルが考案した積み木（「恩物」と呼ばれた）を並べたり、翻訳された歌を歌ったり、外国の踊りを踊ったりすることが主流であった。しかも、それらは全て「遊び」と称して行われていたのであるが、このような大人主導の保育では、子どもが勝手に（それこそ1時間以上も）何かするという活動は「遊び」と見なされなかったのである。当時はまだ「砂場」なる遊具も知られるところではなく、このような事情が相まって、今日では定番ともいえる幼稚園の砂場遊びは、影も形もなかったのだ。では、どのようにして日本の砂場は始まったのか。

日本の砂場の普及に大きな影響を与えた出来事、それはアメリカにおける「プレイグラウンド・ムーブメント（児童遊園設置運動）」である。1885年、ボストンのノースエンド地区パーメンター通りに、アメリカで最初の砂場がつけられた。当時、その地域は、悲惨な状況が渦巻く貧民街であった。失業や貧困、暴力、不衛生が町を覆い、子どもたちも当然のことながらさみきっていた。そんな子どもの健全な成長を願う大

人たちが、全米初の、しかも監督者付きという砂場をつくりだしたのである。

大きな砂場で一日中遊んだ子どもたちは、心から満足し、笑顔で家に帰っていった。遊びを通したエネルギーの発散は子どもたちの心身を解放し、誰の目にもこの遊び場の価値は明らかだった。すぐに、砂場はボストン中に広まり、やがて全米へと普及が拡大した。砂場とともにブランコやシーソー、球技場なども併設され、これが「プレイグラウンド・ムーブメント」と呼ばれる一大画期を成す遊び場づくり運動となったのである。

このようなアメリカの様子は、当時の教育雑誌や社会学関連の研究誌によって日本にも明治30年代に伝わった。日本で、砂場の設置を推進した人物たちは、それを学んでいたのである。

## 砂場の歴史に学ぶこと

アメリカの砂場の起源は、さらにドイツの19世紀前半にまでさかのぼる。ここではその詳細に触れることはできないが<sup>2)</sup>、ドイツでの砂場の設置に貢献した人物たちの砂遊びに対する考えを見ておきたい。

子どもが幼ければ幼いほど、自由に遊ばせなければならない。その機会を与えてやるだけでよい。2歳の娘のヴィルヘルミーネは、もみの木の皮で小さな小屋を作るとか、砂をかき寄せたりするし、小さな車に砂を積んであちこち走らせたりする。(1850、フェルジンク<sup>3)</sup>)

この遊び場には、汚れのない、あまり細かすぎない砂を敷き、一部には雨や雪、日差しを遮る覆いを付ける。先生はあまり遊びに割り込んだりせず、むしろ子どもが自由に走ったり飛んだりして遊ぶようにさせる。道具は単純なものを、しかし数だけは十分にそろえてやる。(1853、フリートナー<sup>4)</sup>)

砂場は子どもたちにとって極めて重要だ。なぜなら砂場は可塑性をもった学習素材を提供してくれるからだ。(略)先生はもっぱら見ている方がよい。しかし、それは参加しないということではない。先生は子どもたちと楽しむ。あるときは手助けをするが、やり過ぎないように。子どもたちに、時折ことばをかけるが、あまり話しかけ過ぎたり、指示し過ぎたりして、子どもたちの発見や創造、なにかを手に入れたりする大きな楽しみを奪ってはいけない。(1889、ブライマン<sup>5)</sup>)

フェルジンクとフリートナーは、幼稚園の創始者フレーベルに先立って幼児学校を設立し、校庭中に砂を敷き詰めた人物たちである。また、ブライマンは、フレーベルの遠縁に当たる女性で、フレーベルを尊敬しつつも、当時のあまりに形式化したフレーベル主義(恩物中心の教育)には批判的で、民衆の子弟を対象とする幼稚園、ペスタロッチ-フレーベル-ハウスを運営した人物である。

いずれも、子どもの自発性と活動の自由を尊重し、砂場・砂遊びが、そのような子どもの活動を保障するにふさわしい遊び(環境)であることを主張しているが、一方、それは単に子どもを放ったままにしてよいということではない。フェルジンクは遊びの「機会」を子どもに「与える」ことが大事であると言い、フリートナーは砂や道具類などの環境整備について言及している。さらにブライマンは、教師が子どもと一緒に楽しみ、手助けすることの必要を説く。もちろんそれが「やり過ぎ」になってはいけないが、教師の役割は決して子どもを「放任」するのではなく、子どもの遊びを理解し、子どもに注意を向けながら関わることだと言っている。このことについてブライマンはさらに、「子どもたちに対するときは、内面的には活発で、外面的には受動的でありなさい」というフレーベルのことばを引用し、大人の、子どもの遊びに向かうべき姿勢を示している<sup>6)</sup>。



シカゴのプレイグラウンドにおける砂場 (Kindergarten Magazine, 1897. Nov.)

このように、「砂場の歴史」は厳然と存在していた。私はこの歴史から次の3点を学んだ。第1に、大人は子どものことは子どもから学ぶべきであり、そのためにはまず子どもを「観る」ことから始めるということ。第2は、子どもは自分自身のなかに伸びていく力を持っており、その伸びていく力は子どもの自由で自発的な「遊び」を通してこそ十分に引き出されるという子ども観・遊び観である。そして第3は、大人や社会の役割というのは、そのような子どもの自由な「遊び」が可能となる環境を整えるということである。

ひるがえって、今日の子どもの遊びを見たとき、砂場の歴史から学んだ3点は、ほとんどが危うい状況にあるのではないかと感じる。子育ては、眼前の子どもを観ることなく育児書や評論家の言説が幅をきかせ、大人や社会は、子どもの自由な遊びを保障するための環境整備ではなく、子どもに「あれをしろ、それはするな」と監視・監督を強めている。これを砂場についていえば、砂場が犬猫の糞尿によって衛生上の問題が発生すると、犬猫よりも子どもを砂場から閉め出すことで「解決」が図られてしまうことが多い。さらに砂遊びは、ただ汚いだけで、すぐには何らかの目に見える効果が期待できない行為、といったとらえ方から、子どもが最も好む遊びでありながら、最も禁止されることの多い遊びともなってしまった。

子ども観、遊び観は、100年前に逆戻りしてしまったような感じさえするが、それでよいはずはない。今こそ改めて「遊びの力」を確認すべきときである。

## 砂遊びが引き出す子どもの可能性

2004年10月から2011年3月までの6年半、京都市内の保育園で私自身も、当初0歳だった乳児が卒園するまでの長期継続観察を行った。そして、砂遊びが実に様々な子どもの力を引き出す要素を含むものであることが確認できた<sup>7)</sup>。

子どもが砂で遊ぶ様子は、一見同じことの繰り返しのようにも見える。ところが、ずっと同じ子どもの様子を見てみると、子どもなりのいろいろな挑戦や変化が見えてくる。最初はうまく使えなかったスコップも、握り方や持つ場所を変えてみたり、砂への突きさし方、掘り出し方を工夫したりと試行錯誤を重ねながら、徐々に思い通りの扱いを獲得していく。同じように見えることも子どものなかでは着実な変化の積み重ねであり、それは訓練ではなく、まさに自由で自発的な行為のなかでこそ見ることのできる、自分自身と砂、道具、周囲の人々との自然で多様な関係づくりのプロセスである。そんな子どもの姿は、次のような視点でとらえることができた。

- ①**感覚** 子どもは主に、視覚的・触覚的に砂との関わりを深める。砂の色や形に関心を向け、乾いた砂、湿った砂、泥状の砂の違いを感じ取り、遊びを変化させる。また、砂の温度や重たさ、圧迫感などを身体を通して感じる。
- ②**情緒** 砂は、子どもの身体や動きをいつもそのまま受け止める。砂に触れる心地よさは癒しでもあり、また遊びへの集中を誘う。砂場では子どもたちの落ち着いた姿や集中して遊ぶ姿が見られ、子どもにとって砂場は、安心できる活動の基地のような役割を果たす。
- ③**身体運動** 砂という不安定な場所で、子どもは足下をしっかりと踏ん張りながら身体を支え、バランスを取りながら、歩いたり跳びはねたりする。道具類を使うときの姿勢や構えを、道具の形や大きさに応じて調整する。
- ④**物の操作** 砂や物に対する手指の細やかな動きは、砂遊びの中で常に見ることができる。この繰り返しを通して「もの」の扱いを上達させたり、泥だんごを壊さないように固めたり、砂に彫刻をしたりといった細かな作業ができるようになっていく。



同じ女兒によるスコップの扱い（左：1歳5ヶ月、右：1歳6ヶ月）



- ⑤**ことば** 砂遊びのなかでは、子どもたちから様々な声や言葉が発せられる。子どもは砂遊びを通して自分の気持ちや思いを語り、人との会話を広げる。またイメージを膨らませていくことで内言の活動を活発にする。
- ⑥**社会性** 遊びながら友だちや保護者とのコミュニケーションを図り、砂でつくるもののイメージを共有したり、協力して一緒につくったりする。また、小さな子どもの面倒を見る年長児の姿や、けんかや仲直りの場面もよく見られる。友だちへの気遣いをしたり、友だちからほめてもらったりしながら人間関係を深める。
- ⑦**想像と創造** 砂場では子どもたちの生活やお話の世界がよく現れる。砂でつくったプリンやお好み焼き、食事や誕生会等の出来事、電車、怪獣等々。経験をもとにした想像が砂の上に形となって表れ、逆に砂の形や状態が子どもの想像を広げ、新たな創造を促す。
- ⑧**認知** 砂遊びは砂や使用する「もの」との直接対話であり、その経験を通して子どもは環境を理解していく。砂の湿乾や温冷、硬さや柔らかさ、物の形や大小関係、上下左右、砂をすくう角度や力の強弱、山の高さ、穴の深さや大きさ、そしてそれらを表現する言葉の獲得。砂遊びは、多様な学びそのものである。
- ⑨**科学的態度** 砂や水の配合を調整して泥だごをつくったり、砂に水を流して水が浸みていく様子を見たり、砂山を壊さないようにトンネルを掘ったりなど。これらの行為は、物質のいろいろな状態に関わったり、変化を生み出したり、物理的な力を加えたりと、自然がもつ法則的なことへの挑戦であり気づきでもある。また、同じような行為の繰り返しも、子どもにとっては見通しと結果を突き合わせるための仮説 - 実験的な意味を持つ。

- ⑩**自己** 砂山に登り切ったときや自分の思い通りに「もの」が使えたとき、あるいは砂型が完成したとき、子どもは喜びの表情や言葉を発する。また、失敗しても何度も挑戦したり、道具のスキルアップを図ったりもする。このような経験が、子どもたちの集中や忍耐、達成感や自信、自己肯定感を深める。

もちろん子どもたちは、これらのことを意識しながら砂遊びをしているわけではない。これは、あくまで私自身の観察から見えてきた子どもの姿の分析である。しかし、こうしてみると、「たかが」と思われるような子どもの遊びが、いかに多くの子どもの力を引き出す要素によって構成されているのかがわかる。まさに、遊びは子どもを育てるということを実感する。

### 人と人をつなぎ、町や地域をつくる遊び

遊びは子どもを育てるということの理解。この理解を共有したとき、人々は、遊びの環境づくりのためにつながっていく。アメリカのプレイグラウンド・ムーブメントは、まさしくその典型であったが、現代の日本においても、子どもを取り巻く状況が厳しければ厳しいほど、つながりは加速される。

2011年3月11日の東日本大震災と原発事故、その影響で福島県を中心として子どもの外遊びは大きく制限された。『福島民友新聞』、同年4月22日朝刊のコラムは、「青空のもとで遊ぶ子どもたちの声が聞こえなくなった校庭や園庭はあまりにもさびしい」と締めくくる。だが、この「さびしい」に込められたいらだちや憤りは、子どもの遊びの大切さを思う人たちの手をつなぐ新たな機会を生んだ。同年12月23日、多くの人々の努力によって郡山市にPEP Kids Koriyamaという巨大な屋内遊び場がオープンし、その中には70平方メートルの室内砂場も設置された。9ヶ月ぶりに全身を砂まみれで遊ぶ子どもの姿を前にして、ある



PEP Kids Koriyama の屋内砂場

父親は「こんなことが、どれほど大事だったかということ、皮肉にも今回失ってみて初めてわかりました」と語った。

福島県内では、この後も様々な形での人々の連携・協力の下、室内砂場ができています。また、砂場以外にも、被災地における冒険遊び場や避難所での遊びのスペースづくり、遊具、おもちゃの提供など、子どもの遊びに関する支援の広がりは周知の通りである。

## おわりに 遊びは「子どもの権利」

国連の『子どもの権利条約』の第31条は、「遊びは子どもの権利」と定めている。残念ながら、この条項は、貧困や虐待、差別、環境悪化等の問題に優先順位を奪われ、普段はなかなか顧みられることのない「忘れられた条項」となっている。しかし、遊びは子どもの心身の安定的な成長をつかさどる、なくてはならない要素であり、それは直接子どもの生命を維持する食事や睡眠などとともに、子どもの存在を成立させる車の両輪を構成する。これは歴史的にも、また今日の日本においても明らかである。

「遊びが危険にさらされているときは、子どもたちが危険な状態にあるときである<sup>8)</sup>」(エドガー・クルーガム)は、核心をついた言葉である。今年2月1日、

国連子どもの権利委員会は条約の締約国に対し、この第31条を改めて見直し、子どもの遊びへの理解と遊び環境の充実を図る施策に取り組むことを求める「一般的意見 (General Comment)」を採択した。今後、その実効を迫る動きが始まる。私自身、遊びへの研究的な視野からと、地域での実践的な砂遊びのワークショップを通して、今後も「遊びの力」を訴えていきたい。

〈注〉

- 1) 石井光恵「幼稚園における砂遊びに関する一考察」『日本女子大学紀要』家政学部第37号、1990、p.17
- 2) 砂場の歴史については、拙著『〈砂場〉と子ども』東洋館出版社、2001を参照されたい。
- 3) Fölsing, J. 原典は、*Die Menschenerziehung oder die naturgemäße Erziehung und Entwicklung der Kindheit in den ersten Lebens-jahren*, Leipzig, 1850。本文はKrecker, V. M. Aus der *Kleinkinderziehung*, 1959, p.174より訳出。
- 4) Fliedner, T. *Lieder-Buch für Kleinkinder-Schulen und die unteren Klassen der Elementar-Schulen, dritte vermehrte und verbesserte Auflage*, Kaiserswerth, 1853, p.242
- 5) Schrader-Breymann 「ベスタロッツ・フレール・ハウス教会新聞 (Vereins Zeitung des Pestalozzi Fröbel Hauses)」1889, No.9
- 6) 同上
- 7) 本観察については、DVD「乳幼児の砂遊び」2011 (新宿スタジオ)、第1巻: 砂遊びから見る子どもの発達、第2巻: あいかの砂遊びー5年11ヶ月の記録ー。拙稿「砂遊びの長期観察から見えてきた保育課題」『発達』2012, No.132 (Vol.33)などを参照されたい。
- 8) エドガー・クルーガム (ボストンのウィーロック大学幼児教育学教授)。「プレイライツ (PlayRights Vol.XXII No.1-2, 2000, Sepの日本語翻訳版)」16号、2002、IPA日本支部、p.14

〈筆者プロフィール〉

笠間浩幸 (かさま ひろゆき)

同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授。専門は幼児教育学・子ども学。特に遊びについての研究をすすめる、子育て支援に関する実践にも取り組む。長年、砂場の歴史から迫る子ども観・遊び観を追究し、現在は砂遊びの楽しさを伝えるための講演とワークショップ「プレイフル・サンドアート」を全国で展開する。IPA (子どもの遊ぶ権利の国際協会) 日本支部代表。



親子によるサンドアート・ワークショップ (八女学院広川幼稚園提供)